



学校法人
鎌倉女子大学

パリ・オリンピックの開会式から — 自由という女神

セーヌ河を舞台に各国選手団と市街の名所を見せる斬新な手法、色彩感あふれる表現、都市空間を立体的に活用したパフォーマンスと、世界最高の都市パリを擁するフランスならではの開会式には、目を見張るものがあった。「フランス国民の86%が開会式が成功的だったと満足感を示した」そうだ。私のフランス人の友人も、テロ対策を始め難しい問題を乗り越えてやり遂げた素晴らしい開会式だったと話していた。

さはさりながら、毎年7月14日に革命記念日を盛大に祝うフランス、なるほど今でも革命への強い思い入れがあるのだろう。華やかに始まった開会式を眺めていると、革命を賛美するドラクロワの名画「民衆を導く自由の女神」をモチーフにした映像が流れ始め、あちこちの窓に赤いドレスのようなものが。突然、口をパクパク開ける自分の首を抱え持つマリ＝アントワネットの姿、弾け散る鮮血を思わせる真っ赤なテープの雨、正直これにはギョツとした。大人の主張を見る人ばかりではない、幼い子供はどう見たのだろう。と同時に、近代の理念とも言うべき「自由・平等・博愛」を掲げて王制を倒しはしたものの、共和制を実現する過程で血で血を洗う蛮行を繰り返した総括がフランスではどのように行われてきたのだろうか、改めて疑問がよぎった。

逸早くフランス革命の野蛮性を指摘したのは、隣国イギリスの政治思想家エドモンド・バークである。彼が『フランス革命についての省察』を刊行したのは、革命の発端となった民衆のバスティーユの監獄への襲撃が始まった1789年の翌年のことであるが、この世界史的な事件が進行する中で、こう書いている。「叡智と美德を抜きにした自由とは何か？それは、考えられるあらゆる悪の中の最大のものである。それは、監督も抑制もない愚行、悪徳、狂気である。有徳な自由が何かを棄えている人々は、無能な徒輩がこの種の調子よい科白を口にすることでそれ〔自由〕が傷つけられるのを見るに耐えない^{*}」。

そのことを同じように深刻に受け止めたフランス人もいた。その著『フランス革命史』で日夜繰り返される恐怖政治の惨劇を描いた19世紀の史家ミシュレや、理想に燃えた純心な若者が他者を断罪する過程で自分もまた断罪されていく悲劇『神々は渴く』を著した20世紀の作家アナトール・フランス。自分の正義を絶対視し、我こそは正義の覇者と狂奔する神々は、自分の理想を渴望するあまり、渴いた喉を血で潤すのである。

私の知る限り、一方においてフランス革命が掲げた自由・平等・博愛の崇高な理念を救い取り、その理念を実現しようとする過程で、何故かくも凄惨な現実を惹き起こしてしまうのか、その原因を本格的に分析し、他方において自由・平等・博愛を実現する社会システムとしての国家を構想しようとしたのは、これもまた隣国ドイツの哲学者ヘーゲルである。

彼もまた青年時代は、友人達と革命歌を唄い、後年フランス国歌となる「ラ・マルセイエーズ」を翻訳し、革命を象徴する「自由の樹」を植える名門テュービンゲン大学の学生であったが、その後の彼は、『法哲学』、『歴史哲学講義』、『小論理学』のあちこちで、次のような議論を展開している。その要点は、二つある。

一つは、自らの良心への反省なしに、社会を急激に変革しようとする企てが陥る誤りである。彼は、フランス革命を宗教改革〔心の改革〕なしに政治改革を行ってしまった近代の愚挙とまで酷評している。もう一つは、政治的手法を考慮せず、単に心情からだけ政治を行おうとする主観的な正義が最も恐ろしい暴政を必然的に惹き起こしてしまうという問題だ。ヘーゲルのこの指摘は、氾濫する情報に操られながら現代の高度大衆社会に生きる私達にも妥当する戒めの言葉のように聞こえる。

開会式を演出したトマ・ジョリー氏は、「ギロチンを賛美する意図は全くなかった」と、何が問題なのか知らずにいるのだろう、ズレた弁明をしていたが、ただこの悪趣味なシーンがあったからといって、パリ・オリンピックに参加した全てのアスリート、国及び団体の努力と名誉にいさかかの傷がつくものでないことは、言うまでもないことだ。政治とスポーツは、正に別物である。当のIOCが公表している「オリンピック憲章」には、こう謳われている。「オリンピック・ムーブメントにおけるスポーツ団体は、スポーツが社会の枠組みの中で営まれることを理解し、政治的に中立でなければならない」。

※パーク著『フランス革命についての省察』中野好之訳 岩波書店

※※参照 拙著『ヒューマニズムの時代 ―近代的精神の成立と生成過程』 未来社

[>前のページへ戻る](#)